

言えようから、情報の留保とか守秘能力の養成といったことは、あまり期待できない。そのせいも、自分の知った情報を他者にうっかり話した結果が、スパイ行為になっていたり、迷惑をかけることになったりすることがよくある。従って、もし話し相手が黙って守秘してくれることをあまり期待できないとしたら、やはり口数は少ない方がよいし、口の堅さは身の安全にも通ずると言えるのではあるまいか。

とはいえ日本でも守秘義務を相手に要請する場合がある。「ここだけの話だが」という前置詞があるし、また文書であればマル秘の印鑑が押される。しかしもしそういう制限がない場合は、守秘義務はないのかというと、そうではないと思う。それ故、守秘能力があまり期待できない場合、何でもかでもマル秘扱いしないと不安でたまら

なくなる。そのためにも何を話すべきかを個々人が主体的に判断できるような訓練を教育過程にとりあげる必要があるのではないか。それは国語教育の一環として重要な分野なのではないかと思われる。

国際間の外交交渉には、機密保持の重要性はとりわけ大きな意味をもっているに違いない。口の堅さが相互間の信頼となって互いに意見を腹藏なく述べ合うことができ、それが交渉の妥結を産み出すための基礎ともなるのではなからうか。我々日本人が日本国内で生活している分には、機密保持の訓練もさして重要性をもたないことかもしれないが、国際社会の一員として生きてゆかねばならないとしたら、やはり教育内容の一環として採り上げられるべき事項ではないかと思われる。

私のうけた一般教育

瀧 川 一 幸

一般教育を受けた教養部時代は私にとってすでに約十年も前の事である。この小文を書くに当って、その教養部時代を想い起そうとしてみたが、記憶が定かでない部分も多い。もっと時間をかければ、記憶も鮮明になるのだろうが……。がともあれ、今その時代に受けた一般教育を想い出してみると、一番鮮明なのは、語学である。これは週に五つもあり、また、私が独文科へ進んだこともある為であろうと思う。ここにこの語学の授業の事を書いても良いのだけれども、私が現在語学の教師であり、専門との関係が強いので、それは他日の事として、私はここに多くの一般教育の授業の中

の一つとして「美学」を選び、それを中心としていろいろ思う事、考える事を書いてみたい。

私はこの授業「美学」を何か特別の理由で受けたのではない。科目案内の中で、何となく「美学」の名にひかれて、教室をのぞいてみたと言う方が正確であろう。また、授業も何か特別の関心をもって始めから聞いたのではない。だんだんと面白くなっていったのである。なぜか？それは今考えてみるに、たぶん私が京都と言う日本の文化遺産を豊富に持っている土地で学生時代を送った幸運のせいである。京都は奈良と非常に近くで、電車で1時間もかから

ない土地である。そして、奈良と京都は、おそらく日本の古代の遺産の大半を持っているのである。そして授業は、この奈良時代からの日本の建築、彫刻を歴史的に並べ、その様式と様式の変遷を説くものだった。ここまで述べれば、読者の皆さまにも理解して戴けると思うのだが、この土地の有利さの為に、教わったものが、少し時間をかけ、足で歩けば実際に自分の眼で見ることができるのである。実際に見たことの有る人は恐らくすぐ理解なさるであろうが、例えば法隆寺の釈迦三尊像や飛鳥寺の大仏等が持っている杏仁形の眼とわずかに笑みをたたえている唇等の顔の表情が作り出す「不思議な頬笑み」はいくら説明しても理解がとどかない所が残るに違いない。想像して戴きたい。受験勉強から開放されて、まだ西も東もわからない大学に入ったばかりの一人の若者。彼が、日曜日、知り合ったばかりの友人と飛鳥寺のあの修復された大仏の前に坐っている姿。話は自然と習ったばかりの北魏式と言われる様式の事になる。そして何よりもやはり、眼の前のあの顔の不思議な優しい頬笑みが彼等の心を打つ。そして千年以上もの昔が今、彼等の心にもも言わず、ただその頬笑みを通してのみじっと語りかける。彼等がそこにロマンを感じても不思議ではないだろう。

これはその一例である。私はこの授業によって案内され、良くあちこちの寺や仏さんを見て回ったものである。そしてそれが一つの機縁となって、日本の古代に本当の関心を持ったのである。奈良時代の個性ある人々が織りなす政治。大らかに自らの感情を表現している万葉集。これらにまで私の関心はひろがり、天皇の名前や関係等まで調べたものである。

私は自慢して言うのではなく、日本の古

代に関して大まかであるかも知れないが、その全体的な理解ができたと思っている。と言うのも、私がこのように言うのは、しばしば議論されることだが、一般教育が目標としているものは何かと言う事について述べたいからである。即ち、一般教育の目標の一つに、「教養」がある。これは独語でBildungと言うが、日本語で言えば「自己完成」と言う事であろうか。このよう意味で「教養を養う」と言う事を考えてみると、学生側の立場で言う時、決して教養を養う所は教室ばかりではない。友人との対話からも読書からも、また自らの体験からも、彼等は自己を造ろうとしていると言えるのである。そして、それらは決してバラバラではなく、互に関連し合って自らの血肉としているのである。そして授業が本当に彼等の生活の中に活かされる時、本当に一般教育が目標としていたものに近づいたと言えると思うのである。

この事を念頭に置いて今一度、私の受けた一般教育を考えてみると、ここにあげた「美学」やその他に「哲学」や「地学」等が本当に私に関心を起させ、今の私の教養の一部となっている。そして、後幾つか受けた授業は、何かの役に立っているのだろうけど、記憶が鮮明でない。それはそれで良い事なのかもしれない。しかし、なぜそうなのかと聞かれれば、それは私の中に本当の関心が生まれなかったからだろうと思う。

昨今、教養部の問題が全国的な問題となっていると聞く。これは、種々の問題があるのだろうとは思ふけれど、その一つに、一般教育が学生の血肉となる彼等の自己完成の中に活かされないと言う事があるのではなからうか？即ち、バラバラな知識として受け入れられるのではなく、総合的な全

体的な知識として受け入れられるべきだと言う一般教育の目的が見失なわれている所があるのではなからうか？本学でも総合コースやプロゼミ等のコース。あるいはクサビ型を目標としている後期一般教育等は、

一般教育の目的とする知識の総合性、全体性を確保する点に重要な意義があるのだと私は理解している。そして、その総合性と全体性こそ、一般教育の生命であるのだと。

私のうけた一般教育

瀬 良 邦 彦

私にとって一般教育とは外国語学習がすべてであったように思われる。第1外国語は専攻の関係上英語であり、第2外国語はドイツ語であった。必修単位は最低8単位と4単位であったようだ。もっとも外国語専攻の学生の場合は第1外国語はその専攻する言語で単位も12単位だった。しかしながら、英語英文学専攻の学生の場合、英語とドイツ語の2か国語だけでなく、要望科目ではあったが、第3外国語（私の場合はフランス語であった）を履修することになっていた。私達の時には、要望とは即ち必修を意味していた。さらに加えて英会話が必修だったので、外国語の学習が一般教育の学習を意味することになったわけである。

授業は講読と文法が中心で、取り上げられた文章も文学作品ばかりであったと記憶している。受講生も文学専攻の学生ばかりであったせいか、別に不満を感じてはいなかったようである。又教える先生の方も文学語学の学生であることを意識されてか、ドイツ語の先生などは特にむずかしい教科書を使用されていたようである。私達学生も今のように授業内容についての問題意識はなく、とにかく遅れないよう頑張るのが精一杯で、出席して（この点はきびしかっ

た）正確に読めるようになることが目的であった。だから私の場合などは外国語に基礎科目の性格を見ていたのかも知れない。

こういうわけで、他の一般教育科目については特に目立った記憶がない。ただおもしろく思った科目は哲学と国文学であり、前者は教科書はそっちのけで（教科書は学生自身で読めばいいということだった）講演会のような授業だったが、内容がおもしろかったからか、大多数の学生が受講していた。その他で記憶していることは、自然科学系列の科目は文科系用、理科系用の二種類があり、自由選択ではあったが、学生は意識的に、たとえば数学であれば、文科系の学生は数学概論を、理科系の学生は一般数学Ⅰ、Ⅱを履修するというように、選択していたと思う。

以上、思いつくままに書いてきたが、教養部における一般教育の印象は外国語で苦勞したというのが主で、自由選択の幅が大きく（特に文科系の学生の場合）、学科目もたくさん開講されていたために、カリキュラムを組むのにかなり自由がきき、自分で選択し、時間割を作り上げたという実感は当時あったようだけれども、今、振り返って見ると、何を基準にカリキュラムを構成したのかははっきりしない。自由はあった